

# 経済・金融 フラッシュ

## 10月マネー統計 ～銀行貸出増加の要因を探る

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

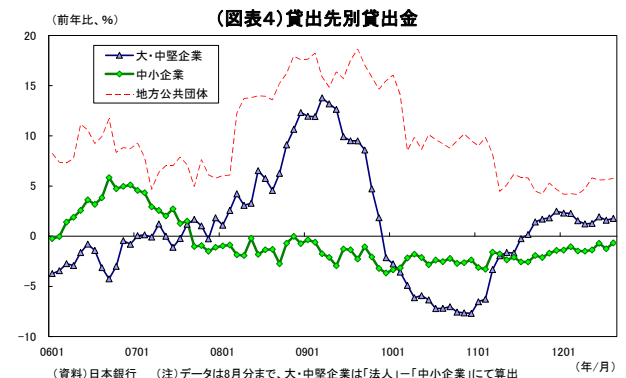
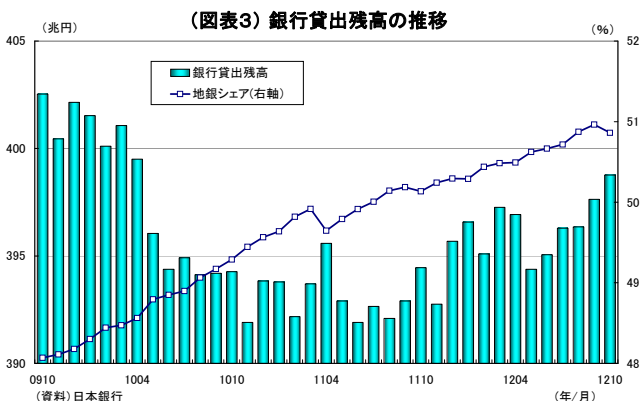
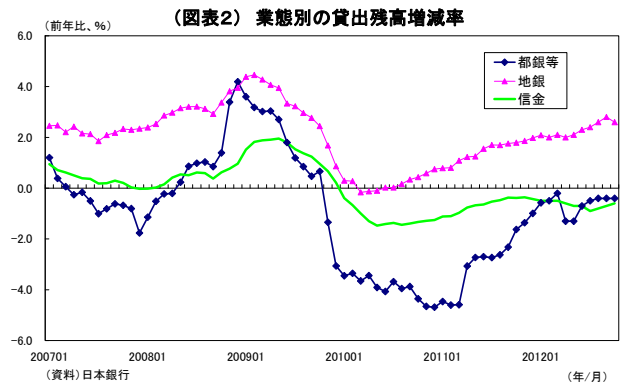
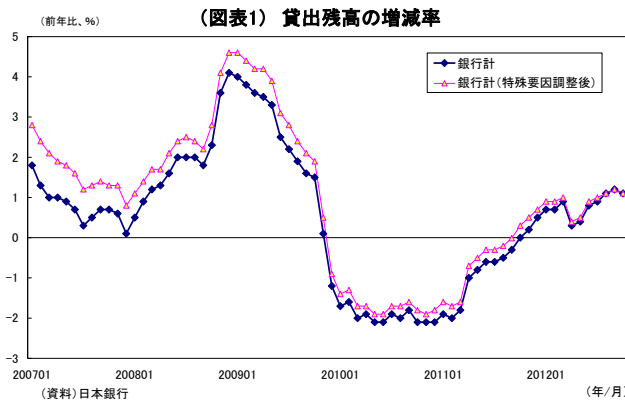
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

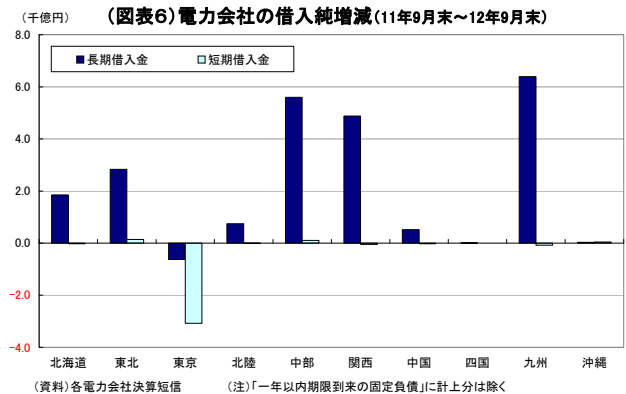
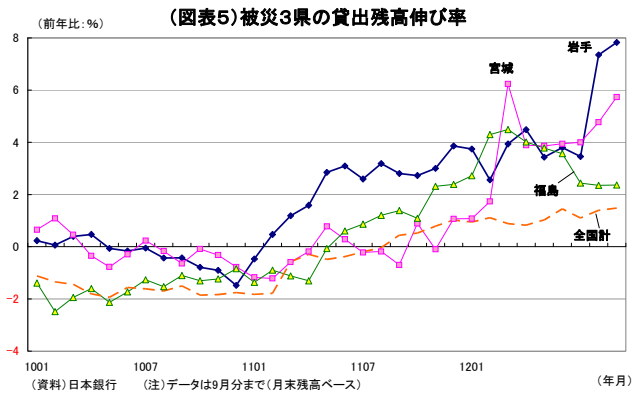
### 1. 貸出動向：貸出の伸びが一服

日銀が11月8日に発表した10月の貸出・資金吸収動向等によると、銀行貸出(平残)の伸び率は前年比1.1%と、3ヵ月連続の1%超えとなったが前月の同1.2%からはやや縮小した。伸び率縮小は6ヵ月ぶりとなる。業態別では、都銀等が対前年▲0.4%(前月改定値も同じ)、地銀等が同2.6%(前月は同2.8%)と、地銀の伸びが引き続き顕著ではあるが、前月からはやや鈍化している(図表1～4)。

貸出の前年比プラスが続いているが、要因を可能な範囲で見ると、「復興に伴う資金需要」は確かに顕在化している。定義は必ずしも一致しないが、「被災3県での貸出残高増加」とすると、9月末時点では前年比5,024億円の増加となっている(図表5)。

またそれ以上に、「電力会社向け貸出」の存在が引き続き大きい。燃料高に加え、震災前ほど社債を発行出来ない状況が続いているためだが、全国10電力の9月末長短借入金(一部不明分を除く)増加額は





中部電力、関西電力、九州電力を中心に前年比で1.93兆円に達している。もちろん公的金融機関や保険会社等からの借入もあるため、この全てが銀行貸出増加ではないと考えられるものの、大半は銀行からの資金調達とみられる(図表6)。

以上、上記2要因の大きな影響が確認されたが、9月末時点の銀行貸出増加額は全体で対前年6.1兆円であることから、復興、電力向け以外の貸出も1年前と比べて少なくとも3.5兆円以上増加していることになる。先行きは景気減速などで下振れリスクが大きいものの、今年度前半については、海外M&Aも含めて幅広く着実に貸出が増加していた姿がうかがわれる。

#### (貸出支援基金の創設)

なお、今後の貸出環境を巡るトピックとしては、10月末の日銀決定会合にて創設が決定された「貸出増加を支援するための資金供給」が挙げられる。具体的な枠組みは未定だが、骨子素案によれば、預金取扱金融機関の貸出増加額に対して、希望に応じて低利(現行0.1%)・長期で資金供給すること。従来も「成長基盤強化を支援するための資金供給」という枠組みが存在したが、今回は“総額無制限”、“1金融機関当たりの上限なし”、“資金用途制限なし”という点でより使い勝手が良い。

そもそも資金需要に繋がる成長期待が乏しいという構造的な問題は変わらず、また、低金利競争を助長する副作用の懸念も払拭できないが、銀行貸出にとって新たなプラス材料にはなりそうだ。

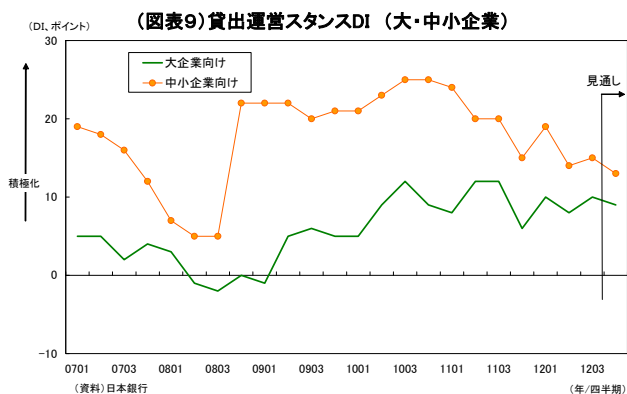
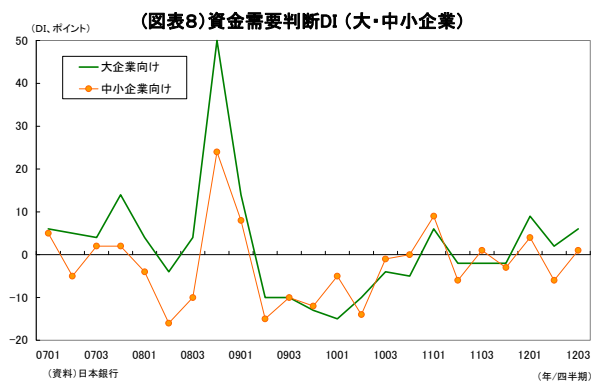
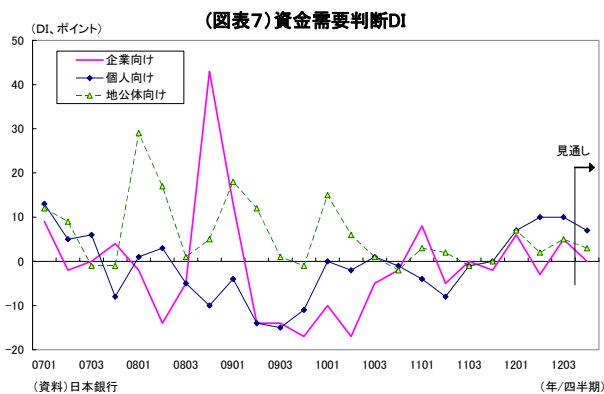
## 2. 主要銀行貸出動向アンケート調査：企業の資金需要は2四半期ぶりに増加

10月22日公表の主要銀行貸出動向アンケート調査によれば、2012年7-9月期の銀行から見た企業の資金需要増減を示す企業向け資金需要判断D.I.は前回(4-6月期)の▲3から8ポイント改善の5と2四半期ぶりに改善。D.I.はプラス化、すなわち増加とする回答が優勢となった。企業規模別では、大企業が6(前回比4ポイント上昇)、中小企業が1(同7ポイント上昇)と、水準では大企業の方が高いものの、改善幅では中小企業が大企業を上回った。業種では建設・不動産の改善が顕著になっており、復興需要の好影響をうかがわせる内容である。増加の要因としては、「貸出金利の低下」が企業規模を問わず最多となっており(大企業では手許資金の積み増しも同率首位)、金融緩和の効果も一定効いている模様。

個人向け資金需要判断D.I.は10と前回から横ばいだが、D.I.の水準では企業向けを上回っている。牽引役の住宅ローンの増加理由では、「貸出金利の低下」が最多となっており、企業向けと同様である。

今後 3 ヶ月の資金需要見通しは、企業向けが 0(前回比1ポイント低下)、個人向けが7(同 3 ポイント上昇)と方向性が分かれた。企業向けでは景気の弱含みという悪材料がある一方、個人向けでは消費増税前の住宅駆け込み需要という追い風が期待されることが影響しているとみられる(図表 7,8)。

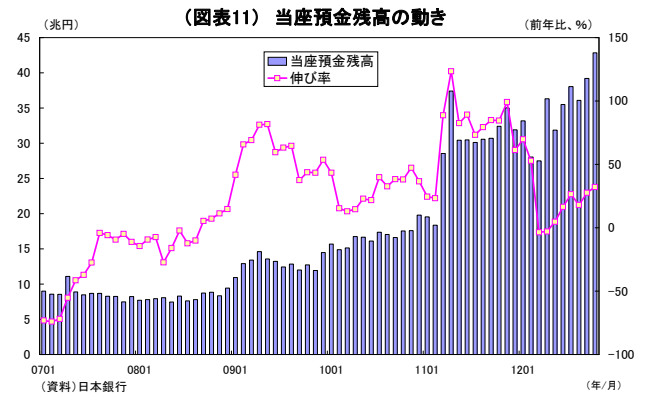
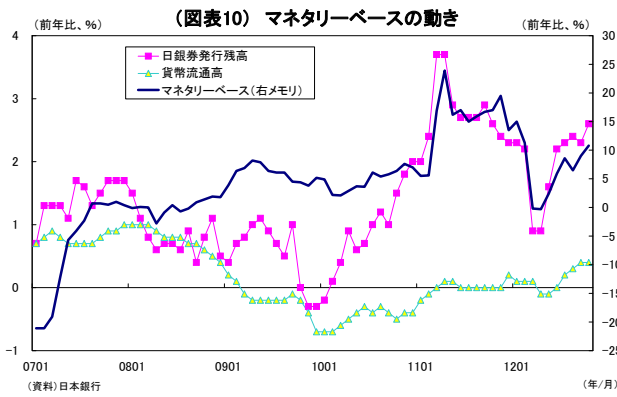
なお、7-9 月期の銀行の貸出運営スタンス変化を示す貸出運営スタンス D.I.は、大企業向けが 10(前回比 2 ポイント上昇)、中小企業向けが 15(同1ポイント上昇)と、ともに貸出運営積極化の動きが加速した(図表9)。



### 3. マネタリーベース：日銀当座預金は初の 40 兆円越え

11 月 2 日発表の日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示す 10 月のマネタリーベース(平残)伸び率は前年比 10.8%(前月は同 9.0%)と連月で拡大した。日銀当座預金の伸び率が前年比 32.2%(前月は同 27.6%)と拡大し、伸び率を押し上げた。季節調整済み前月比年率の伸び率で見ても 32.1%と大幅なプラスに。マネタリーベース残高(平残)が 128.1 兆円、当座預金残高が 42.8 兆円と、ともに過去最高を更新した。日銀当座預金残高が平残で 40 兆円を越えたのは初であり、10 年前との比較では 2.8 倍に相当する規模になっている(図表 10,11)。

日銀は度重なる追加緩和によって資産買入れ等基金を増額し続けている。今後も同基金による資金供給が続くため、マネタリーベースは増加基調を維持し続ける見通し。

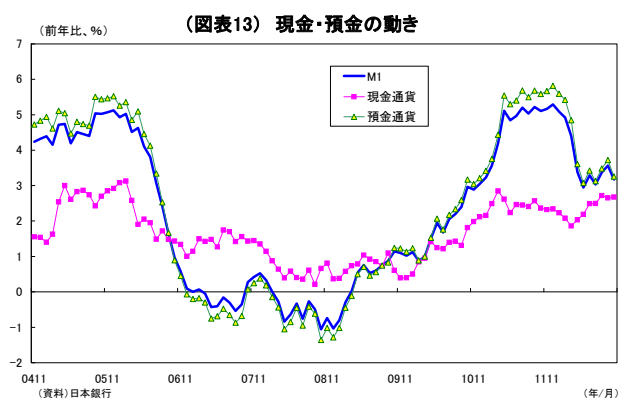
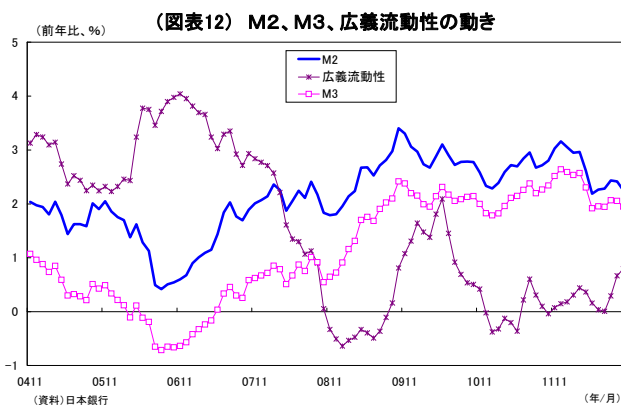


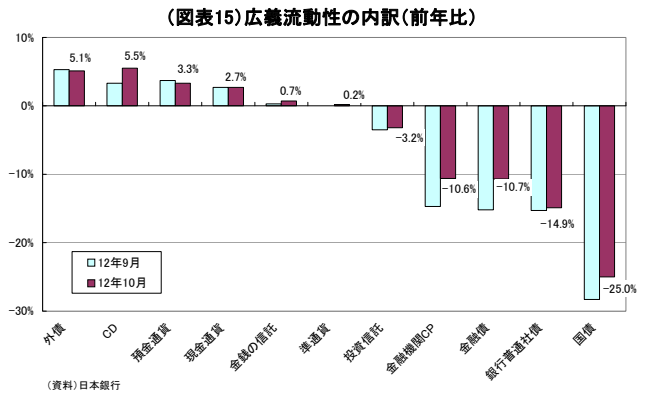
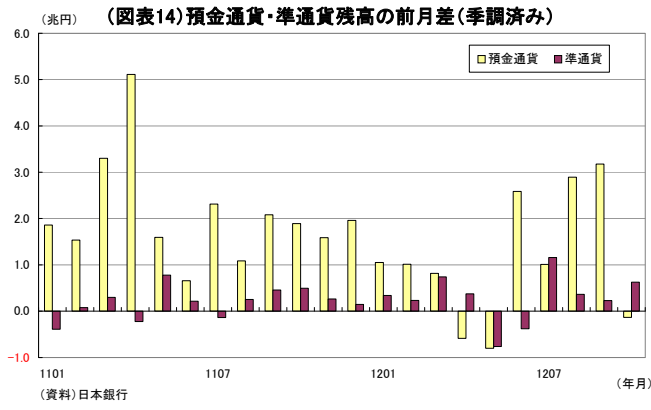
#### 4. マネーストック：預金通貨が久々の流出超に

通貨供給量の代表的指標である10月のM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高の伸び率は前年比2.3%（前月は2.4%）、M3（M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同1.9%（前月改定値は2.1%）とともに前月からやや伸び率が縮小した。一方、M3に投信や外債などを含めた広義流動性の伸び率は前年比0.8%（前月は0.7%）と水準こそ低いものの、伸び率拡大は3ヵ月連続（図表12）。

10月は普通預金など預金通貨（季節調整済み）の前月差が久々にマイナスとなった（図表14）。一方、CDや金銭の信託の前年比伸び率が拡大しているほか、投資信託（元本ベース）や金融債などのマイナス幅も縮小している（図表14～15）。

直前の数ヵ月に預金通貨は急ピッチで積みあがってきただけに、その反動が出ただけかもしれないが、10月は円安・株高など投資環境に一旦改善がみられた局面であったため、マネーのリスク回避的な動きがやや弱まった可能性がある。





(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。